

『精神現象学』「自己意識」章における〈生命〉の意義

片山善博

問題の所在

私とはなにか。私とはどういう現象か。このことをもっとも原初的なところから考えてみたい。それは私の基盤はどこにあるのか。私を私として成り立たせている根源にあるものは何かを考えてみることである。私とは、ある意味で、社会的な関係から言えば、他者によって承認されてはじめて〈私は私である〉といえるであろう。しかしもう一方で、私自身の生きているという働きのうちに〈私は私である〉という感覚の源流を探ることもできるのではないか。私が生きているということ—これはもちろん具体的には物質代謝や食物連鎖あるいは生存をめぐる闘争等々が含まれるが—の感覚があって、そのうえで他者（他人）との関係を通じた私が具体的に定位されるのではないか。一般にヘーゲルといえば、〈私は私である〉というのは、他者に媒介されて初めて具体的に定位されると解釈されている。それはもちろんそうであるが、ヘーゲルはその源流に生命の経験を考えていたのではないか。すなわち生命の経験のうちに〈私は私である〉ということの萌芽があるといえるのではないか。自らを生命として経験することは、自己を一つの生命過程として捉えることでもある。ある意味で生命における普遍と個別の一体化の経験でもある。こうした経験がもとにあって、自己意識は社会性の場面に入っていく。したがって『精神現象学』において「理性」章以降で問題となるヘーゲルの共同体構想（共同性の自覚の経験）においても、そこにはヘーゲルの生命論の構図が原型にあったのではないかと思われる。こうした点も、『精神現象学』「自己意識」章をみながら考察してみたい。

さてこれから検討する『精神現象学』「自己意識」章冒頭部分は、自己意識

の成立過程さらに〈生命〉と〈精神〉との関係（あるいは生命から精神への移行）を見る上で、またヘーゲルがフランクフルト期から（内容の変更を伴いつつも）持ち続けてきた〈生命〉というモチーフが『精神現象学』のなかでどのような役割を果たしているのかを探る上で極めて示唆的である。しかしながらこの「自己意識」章冒頭部分は、解釈が大きく二つに別れている。

まず一つ目の解釈は、この過程を「意識の経験」という側面から捉えたものである。この「自己意識」章では、意識は、「意識」章で「感性的確信」「知覚」「悟性」という意識形態を取りながらさまざまな対象の経験を経て、対象の本質が自分の知の働きとは別のものではないという確信をもつにいたり、〈自我＝自我〉という確信を抛り所にする自己意識として、まずは欲望という形態を取り、この確信を、他の生命（生命的自然）を否定することによって充足させようとする。その結果、なるほど自己充足という満足を得る、しかし同時にこの充足を得るために、自己意識は、逆に対象に自分が依存していることを思い知り、かえって対象の側の自立性を経験する。こうした欲望の経験を通して、意識に明らかになったことは、一つは自己意識が、〈自我＝自我〉という自立的であるが他在を欠いた空虚性（自我＝自我の同語反復）を乗り越える契機を得たという点、さらに自分が対象に依存しているということ（対象の自立性）から、自己意識は真の充足を得るためには他の自己意識（自己否定の中にありながら自立的な対象）を自分の対象として要請しなければならないという点にある。たしかにこの解釈は「自己意識」章冒頭部分の解釈としては一貫している。しかし同時に、ヘーゲルがなぜここで生命過程について詳しい論述をしたのかが逆に不可解になり、また生命と自己意識との関係もあいまいになる。

二つ目の解釈は、生命論の意義を重要視する。そして〈生命〉が自己意識の成立にとって決定的な役割をはたすという、要するに生命と自己意識の連続性（同一の構造を持つこと）を強調した解釈で（初期のマルクーゼ⁽¹⁾やガダマー⁽²⁾等）、存在論的な解釈ともいえる。しかしこの解釈では逆に、自己意識の〈自我＝自我〉の確信という近代的自我の独自の意義が軽視される可能性が高くなる。

この二つの解釈は「意識にとって」と「我々にとって」という二つの側面をそれぞれ独立に捉えたものである。あるいは一方の側面を強調したものであるといえる。しかし「緒論」の解釈を考えれば、この二つの解釈は対立するもの

ではなく、統一的に捉え返されるべきであろう。すなわち欲望の経験とは、生命を対象とし、自我＝自我の確信がこうした生命を対象とすることでは成し遂げられないという経験である、しかし同時に、その背後においては自らを生命過程を経て類（主体＝意識）として規定していく展開の運動なのである。したがって、私は、こうした視点から、なぜヘーゲルは「自己意識」の成立過程の叙述において生命を論じたのか（『エンチュクロペディ』「主観的精神」では生命については論じられていない）、さらに『精神現象学』における生命論の意義（精神との関係で）とは何かを考察し、ヘーゲルのモチーフを導き出すのが本小論の課題である。

結論を先取りして言えば、まず（１）デカルト以来の自我概念（自我は自我であるという確信）を〈生命〉という相から捉えなおすことで、〈自己意識〉を〈身体を伴った生きた自己意識（類）〉（これはホップズ流の自然状態における個体の自己保存に立脚した人間理解の批判的継承ともいえよう）として定位し直すことが目論まれている。こうした生命的自己意識であることによって、「自己意識」章のその後の展開は、〈自我の確信〉と〈生命（身体）〉との二面性をはらんだ自己意識間の展開としての側面を持つ。また（２）〈生命〉と〈精神〉との関係で言えば、生命論の構想が〈精神〉の展開の原型になっていることが示されているといえる。つまりヘーゲルの『精神現象学』の精神の展開は、生命の構造をもとに構想されのではないかということである。しかしこの点については初期ヘーゲルの生命論のモチーフがどのように生かされているかという問題とともに生命論の射程範囲と限界が指摘されなくてはならない。

1 自己意識の存立過程

では（１）の問題から見てみよう。ヘーゲルは近代的自我観の前提となる自我の明証性（自我＝自我の確信）に対して、「自我は関係の内容であり、関係することそれ自体である」（S.103）という観点を打ち出す⁽³⁾。したがってヘーゲルにとって自己意識とは、自我が自我として成り立つ運動（他在を組み込んだ中で〈自我＝自我の確信〉を見いだす運動）である。つまり〈自我＝自我〉の同一性が成り立つためには、他在（他者の存在）との関わりが不可欠ということであり、この他在との関係の中でいかにして自己同一性を保っていくかという運動が自己意識なのである。ヘーゲルの「生命」についての詳しい叙述は

この自我を自我として成立させる場面で登場する。自己意識とは、端的に言えば、〈他在〉からの〈自己還帰〉の運動である。つまり他なる存在を自分自身の働きとして捉え返す運動である。ここから言えるのは、自己意識にとって、疎遠なるものは存在せず、いかなる対象とかかわっていても〈自我=自我〉の確信をもっているということである。それなら他在は存在せず、〈自我=自我〉の確信のみがあるのかといえそうではなく、ヘーゲルはこれを「運動を欠いた同語反復」(S.104)と呼ぶ。他在との関わりがあるからこそ、自己意識は運動として成り立つのである。この他在(対象)は、「感性的世界の広がり」(ibid.)たる生命的大自然である。したがって自己意識は、まず欲望という形態で、生命的自然と関わりながら生命的自然を否定し、自分自身との同等性(自己保存)を維持していこうとする。しかしその帰結が、欲望による生命の自立性の経験である。つまり自分が対象に依存していることを経験するのである。ここでヘーゲルは、生命レベルでの欲望の経験に話をすすめるのである。こうした生命の経験(自分が生命として他の生命にかかわる経験)は自己意識にとって一体何を意味しているのであろうか。ヘーゲルは自己意識に生命過程を経験させることによって、自らを〈類への展開を含む生命過程をそなえた自己意識〉として自覚させようとしたのではないか。そして生命の展開のなかから自己意識を(抽象的ではなく)生きたかたちで(類であり類を自覚するものとして)導出しようとしたのではないか。つまり自己意識(自我が自我として成り立つこと)の存立条件に、生命の展開はかかわっていることを明らかにしようとしたのではないか。

ではその生命の過程についてヘーゲルの叙述に沿ってみておこう。まずヘーゲルは生命の本質を、あらゆる区別項を廃棄する働きに見る。ヘーゲルはそれを「純粋に軸回転する運動」あるいは〈空間を生みだす時間の働き〉と見ている。つまり生命は端的に流動性である。したがって個々の区別項(個体的生命)は存在してもそれは完全に自立したものではなくあくまで全体の契機にすぎないのである。しかし実際に生命の運動を展開させるのは、こうした個々の区別項(個体的生命)である。ここから具体的に生命の在り方が問題になる。したがって生命の展開の叙述はこの〈個体的生命〉に即して行なわれる。

個体的生命は、「特定の無限な実体として、普遍的な実体に対立して登場し、この実体との流動性と連続性を否定して、この実体に解消されないものとして、

自らを主張する。かえって、この実体から切り離されて、それを廃棄することによって自らを維持する。」(S.106) ここでは個体的生命の自己保存の活動が描かれている。個体的生命が生命的大自然(普遍的生命)に、自立しながら、かかわるという場面である。つまり先には普遍的生命(流動性)が本来的で、形態の区別項が副次的であったのに対し、ここではこの流動性が副次的になっている。この場面は〈食いつ—食われつ〉という食物連鎖をイメージするとよい。個体的生命が自己保存をするということは、他の個体的生命を食い尽くすということである。わたしたちが生きものとして生きているということ(個体としての自己保存)は、そく他の生命の犠牲のうえに成り立っているわけである。

しかしヘーゲルは、この自己保存の過程にもうひとつの別の側面を見ている。つまりここで食い尽くされるのは、単に他の生命ではなく、普遍的生命の持つ流動性であるということである。つまり自分自身との統一(自己保存)の感情が他者との対立を廃棄するのであり、ここで他者との連続性、本来的には普遍的生命との連続性(流動性)を経験することになる。「個体が自らに与える自分自身との統一(自己保存)は、まさに区別項の流動性であり、言い換えれば普遍的に解消することなのである。しかし反対に個体の存立の廃棄は、同様に個体を生み出すことである。というのは、個体の形態の本質、普遍的生命、独立に存在するもの(個体的生命)は、即自的に単一な実体であるので、普遍的生命や個体的生命は、自らの他者を自己のうちに立てる(含む)ことによって、この自分の単一性、言い換えれば自らの本質を廃棄するのである。」(S.106)ここに個体的生命と普遍的生命との対立(それぞれの本質)が廃棄(否定)され、両者が一体のもの(統一)として、新たな生命のありかたが定位されてくる。これが類(普遍と個別を一体的なものとして捉え返す生命)である。つまり生命は、個体的生命(個々の諸形態)と普遍的生命(個々の形態の区別を廃棄する流動)の自己否定的媒介運動として展開され、そこから「自己を展開しその展開を解消しこの運動において自己を単純に保持する全体」(S.107)として、すなわち自立しながらも自己否定という契機を含みもつ全体的な生命(類)として「意識を指示し」、〈類であり「類を自覚している自己意識」〉として自らを見いだす。つまり生命的な欲望を通じて、個体的生命に類の感情が生じてきたわけであるが、これはもはや生命的な欲望のレベルではなく、意識(本

来的には自己意識)にふさわしいものである。したがって類は、意識を指示し、意識によってのみ把握されるのである。こういう意味で類とは、単に生命的な過程であるだけでなく、意識の側面を持ち、生きた人間としてあらわれるのである。ここで先に抽象的に語られていた自己意識は、生命的自己意識として定位される。これはある意味で〈身体を伴った自己意識〉ともいえる。

まずはじめに自己意識は、自らの「類(普遍と個別の一体性)」を〈自分であること〉という次元で捉える。つまり私であることによって、私は他の人間とつながっている(普遍と一体である)という確信である。自己意識が、この「純粋な自我(私であること)」をどのように実現していくのがこれからの問題となる。しかし自己意識は、この確信を満足させようと「対象化された形で」他の自立的な生命に関わるが、かえって対象の自立性を経験し、欲望という形態では成就できないことを経験する。「欲望と欲望の充足において獲得された自分自身の確信は、対象に制約されている。というのはこの確信はこの他者の廃棄を通じて存在するからである。廃棄が存在するためにはこの他者が存在しなくてはならない。」(S.107)

しかし自己意識は今や「類」であるから、自分の確信を満足させるために、自己と同等の他の自己意識(徹底的な否定を行ないつつ自立的である生命)を要請する⁽⁴⁾。「この対象は、自己自身に即した否定であり、その点で同時に、自立的であるがゆえに、意識である。」(S.108)こうして自己意識の原初的な相互承認である「類」の経験から他者関係の場面が開かれる。「自己意識は自己意識に対してしている。こうして実際に自己意識は存在する。というのはここでようやく自己意識にとって、この他者と自分自身との統一が生じてくるからである」(ibid.)ここに「良心」で一定の解決を見る相互承認論の枠組みが成立する。「こうしてすでに我々には精神の概念があらわれている。これから意識に生じてくるのは、精神とは何かという経験である。精神とは、自己自身のうちにある対立物を完全に自由に自立したものとして解放しながら、つまり独立しているさまざまな自己意識を生み出しながら、それらの対立物の統一であり、さまざまな自己意識の統一物である絶対的実体である。」(ibid.)

しかし自己意識が「類」を自我として固定的に捉えると、「類」は自我と生命に分裂し、この分裂は「自己意識」章A. B.の展開のなかでさまざまな形であられる⁽⁵⁾。例えば、自らの自立性を得るために自らの生命(身体)を賭

す段階（承認をめぐる闘争）、次に生命にこだわって非自立的存在（奴）となりつつも主への服従を通じた労働によって内面の自由を獲得していく段階（主と奴の弁証法）等々で示される。そしてさらにこの生命との距離の内面化が「ストア主義」「懐疑主義」を経た「不幸な意識」の源泉にあるといってもよい。

2 〈生命〉と〈精神〉

次に（2）の問題についてみてみよう。ヘーゲルは、生命の過程をもとにして精神の展開を描いているのではないか。もちろんヘーゲルは、フランクフルト期の生命の思想とは違って、自己意識という自覚の契機を軸にして、実体と主体の問題を考えているのであるが、その核にある発想は生命過程にあるといつてよい。

まず両者の違いの面から押さえておこう。生命過程での個体の他者との関わりにおける〈否定〉をヘーゲルは次の三つの点で不完全であるとする。ヘーゲルは、周知のように〈否定〉に特別な意義を持たせており、個体の徹底した自己否定（の働き）の中で自己を回復する運動にこそ真理があると考えていた。つまり生命においては、否定は、①まず「他者において、すなわち欲望において」行なわれる。つまり個々の生命（個体的生命）の為す自己否定は、自分自身で行なう否定ではなく、他者（外部のもの）による否定である。つまり否定の外在性が言われている。次に②否定は「他の無関係な形態に対して限定されたものとして」あるということである。つまり個体的生命の否定は、徹底したものではなく、特定の限定的な否定（全体に対して自分の自立を主張するのみ）であるということである。つまり否定の限定性が言われている。そして③否定は、「生命の非有機的自然（個体的生命に対立した実体）として」（S.108）ある。否定は、実体（生命の流動性）の側による否定作用であるということである。個体的生命の自己否定は、全体の流動性を受け取るという形でしか行なえない。つまり否定の非有機性が言われている。この三つの点を通じて生命の円環は成り立つのであるが、これらの点を通じて明らかになるのは、生命の円環においては、個体自身による個体に即した自己否定が欠けているということである。この意味で個体の自己規定は不完全なものである。これに対して自己意識は、他者のみでなく、自己自身をも否定し得る自立した存在であるというこ

とである。つまり自らの否定（自らの他的な存在）との関わりの中でありながら、同様に〈自立的〉である個体、言い換えればまわりとの関係を断ち切った中でありながら、他者との「普遍的流動性」をもっている個体であるということである。こうした類（普遍と個別の統一）であり類を自覚している自己意識であるがゆえに、自己意識は、互いに自己の徹底した否定を通じても自分の自立性を保つという自由の概念をもっているのである。したがって、自己意識が作り為す社会（共同性）の場面で承認の成立の可能性を開いていくのである。

しかし生命（個体的生命）の行なう否定は、こうした不完全な否定であっても、ここには類を成り立たせる運動がある。そして自己意識が自己否定を行ないつつ自立的であるのは、そもそも自己意識が、類であり類を自覚している生命であるからである。つまり類（普遍と個別の一体性）を自分の生命において自覚するという経験を経たからである。ここに生命の行なう否定との連続性（通路）を持ちつつも、自己意識の否定は「絶対的」となる。したがって否定の徹底性という点に生命と精神の違いがあるわけであるが、自己意識が〈類〉であるがゆえに、社会的な承認の枠組み、その発想の原型は〈類の生成過程である生命過程〉に見いだすことができる应该说よい。「類そのものを対象とし自覚的にそれ自身類であるこの他の生命は、自己意識であるが、まずは、ただこの単一な本質として自己を知るだけであり、純粋な自我として自己を対象とするにすぎない。これから考察される自己意識の経験の中でこの抽象的な対象（抽象的な自我）が、自己意識にとって豊かになり、我々が生命の経験の中で見てきたものを展開するのである。」(S.107) こうして生命の過程で見てきたことが、これからは社会性の場面での自己意識間の関係を通じて、自己意識間の承認がいかにして成り立つかの運動として展開されるのである⁽⁶⁾。例えば、ここでは個体の自己保存という側面からヘーゲルの生命の叙述を見てみよう。まず個々の「形態がこのように自立しているということは、特定のものとして他方（の形態）に対してあらわれる。というのは、この自立性は、分裂されたものであるからである。こうした分裂の止揚は、その限りで、他の形態を通じて生じる。しかし分裂の止揚は、同様にかの形態自体に即してある。というのは、かの流動性が自立的諸形態の実体であるからである。」(S.105)ここで言われているのは、〈自己-他者関係の問題〉と〈実体-主体の問題〉である。つまり、自己-他者関係を通じて〈実体-主体〉の相互媒介がはかられるとい

う構図である。この構図は、「我々としての我、我としての我々」としてある精神の概念が展開される場面でもあらわれる。「理性」章B、C.においては、近代的個人（自己保存）を前提にして、個が共同的なもの（人倫的実体）をどのような過程で規定していくのか（市民的共同性としての事そのものの成立過程）が問題になっている（スミスの商業社会が念頭に置かれていると思われる）し、「精神」章では、実体を否定する形で生み出された近代的個人が新たに実体を規定し自覚していくという過程が問題になっている。ここに同時に両者の差異も示されている。生命では個の自己保存と普遍的生命の一体性が強調されるが、精神という場面では、自己意識という対自（自覚）化された主体を軸として自己に即した実体（共同性）の獲得と自覚の可能性が開かれている。

3 『精神現象学』における〈生命〉の意義

ここまで「自己意識」章冒頭部分を中心に、生命と自己意識との関係を見てきた。すなわち（1）では、自我が自我として成り立つ局面で、生命の経験が根本的な役割をはたしているということ、さらに（2）では、生命の展開は、「自己意識」章以後の「精神（共同性）」の展開のモデルになっているということを見てきた。ここでは（1）と（2）を統一するという形で、『精神現象学』の中で〈生命論〉がどのような役割をはたしているのかを簡単であるが見ておきたい。

ところでこうした「自己意識」章冒頭部分の解釈は生命の意義を不当に高く評価しているという批判を受けよう。というのは、ヘーゲルは『精神現象学』執筆時点ですでに、生命の哲学から精神の哲学へと立場を変えさせていたからである⁽⁷⁾。私としてはこうした観点を受け入れたうえで、生命論のもつ意義とその射程範囲を見定めることを、この箇所を分析するにあたっての課題とした。したがって私の解釈は、この冒頭部分には、まず初期ヘーゲルの生命論とのつながりという側面と断絶の側面が両方、入りこんでいるという立場にある。そしてさらにこの両側面が『精神現象学』の展開のなかにあらわれているのではないかと考える。つまり生命論をモデルに共同体を構想しているが、生命過程はあくまで不十分な形態である。共同体を考えていくうえで、「理性」章BとCで問題になるような市民社会（事そのものを軸として成り立つ共同性）

も、「精神」章Aのギリシア共同体にしても、あるいはフランス共和政にしても、個を軸とした実体の形成と自覚という点では、不十分であるが、こうした個を軸とした共同体の構想のもっとも原初的な形態に不十分ではあるが生命過程における〈類〉の共同性があったといえる。個を軸とした実体の自覚という意味での共同性は、「良心」で一定の解決を見る。ここでは実体（純粹義務）を確信した「行為する良心」と「批評する良心」という個体間の最後の自己放棄（徹底した否定）を通じて、真の和解（自我＝自我の具体的な成立）がもたらされる。こうした意味（否定の徹底性という意味）で生命を克服したところに精神が成り立つという『精神現象学』の根本にあるモチーフが明らかになる。これは死を通じての再生（否定の否定）というモチーフとも重なる。

ところで先に見たように、生命的自然は、生命現象のなかで類を導きだした。これに対して自己意識は、他者関係の中で共同性（実体の主体化）を形成していくのである。この枠組みは、個体（対自）が普遍（共同・即自）を自己のものとして自覚していく歩みを決定づけている。生命では個別性の廃棄（死）がそのまま普遍的生命の維持につながっていたが、自己意識は、どうしてもなく個を引きずりながら、対自を軸として、個別性（有限性）を自覚していくなかで、普遍性が何であるのかを自覚していくのである。ここに対自（自覚）化された主体を軸とした精神の獲得と自覚の可能性が開かれている。個体的生命が、自らの死を通じて普遍的生命に帰るように、自己意識は、生命の死を、対自を軸として（自覚化しつつ）精神的な場面で、普遍と個別の一体性として永遠化するのである⁽⁸⁾。したがって自己意識は、自分の生命を認めたくらんで、自分の生命の〈直接性〉を陶冶していく過程をもち、これが最終的には有限性の自覚にいたる。そしてこの全体の過程こそが生命の精神化の過程である。たとえば「啓示宗教」で問題にされるように、これは宗教的には死と再生の儀式に見られる。肉体の死の自覚を通じての共同的なものの自覚である。これはある意味で対人間関係を通じての対自然関係の再規定でもある。こうして最終的に自己意識は、自分の限界を乗り越える。それは、この限界を自分の〈知〉の働きに還元することによってである。とはいってもこのことは、外側から主観的に知るのではなくて、経験（意識の経験の陶冶過程）のなかで、実現していくのである。したがって最終的に、自己意識に、〈知〉として現われてくる生命が精神であり、これが概念として現われたとき〈絶対知〉にいたるのである。

まとめにかえて

私とは何か、私とはどういう現象か、について「自己意識」章を中心に見てきた。このとき生命過程を通して見えてきたことは、私とは、生命過程の流動性の内面化だということである。これは生命の「精神」化といってもよいと思う。つまり私とは、生命過程のように自らを全体的な生命（普遍的生命）へと解消してしまうのではなく、こうした生命過程の運動を自らの個体のうちに内面化したものだといえよう。したがって〈私〉とは、他在（他者）に解消されながらも（他者とかかわっていながらも）、〈私〉という個を保持し続けることもできるし、自覚することもできるのである。こうした〈私〉であることによって、私とは、〈個〉でありながら、全体に解消されずに共同性を実現できるのである。こうした共同性は、他の自己意識（生命的な自己意識）との関わりの中からしか実現できないのである。私とは、他者との関わりの中で、その在り方（私の内容）をかえていくであろう。つまり私が〈私〉であることの中に、さまざまな可能性を含み持つものである。ヘーゲルの叙述を見ていけば、私が〈私〉であり続けること（自己意識の運動）が、世界や社会や歴史、宗教を自己として含み持つことなのである。これはもちろん意識の経験の歩みとしての教養形成（Bildung）の過程を経なければならないのであるが。こうした過程を通じて、私にもっと現実的具体的な〈私〉の可能性が開かれるであろう。私が〈私〉であること、これはある意味で、現代において、再び問いなおされている課題でもある。（私が私であることは、ある意味で奇跡的なことである。）したがって現代において、私が〈私〉であるということ（とその実感）が、一体どこから生まれてきているのか、さらには、どういう条件・制約によって成り立っているのかを問うことは、これから私（私たち）が真の意味で私（私たち）であり続ける（可能性を問う）うえで、もっとも重要な課題といえるであろう。

註

引用は、Gesammelte Werke, Bd.9, Felix Meiner.による。

- (1) ガダマーは生命と自己意識の関係について次のように述べる。「生きて
いるものの自己関係は、ただ自分自身を意識する自我の方からだけ考え
られる。…そもそも自己関係を考え得ることが問題になるとき、自己意識
が優位に立つのは必然的である。しかし反対に、自己意識と生きているも
のの生きた運動の構造は同じであるということが教えてくれるのは、自己
意識は、自我=自我という点のようなものでは全くなく、むしろヘーゲル
が知っているように『我々なる我、我なる我々』つまり精神だということ
である。」(H・G・Gadamer, Hegels Dialektik des Selbstbewußtsein,
Materian zu Hegels Phänomenologie des Geistes, Surkamp,
Furankfurt am Mein, S.222)
- (2) マルクーゼは、「生命は、それが存在者の『普遍的媒体』および『流動
的実体』であるがゆえにのみ、はじめて意識であり、自己意識である。
『自己意識』としての生命は、この存在論的な『生命の本質』を前提とし
ている」と述べて生命と自己意識の連続性を強調している。(H・Marcuse;
Hegels Ontologie und die Theorie der Geschichtlichkeit, Frankfurt
am Main, S.262)
- (3) ここでヘーゲルは、自己意識を、〈自我=自我〉と〈自我と自我の外なる
存在〉に固定させる近代的世界観の考え方を批判しているといえよう。
ヘーゲルが問題にしているのは、自己意識にとっては、自我の外なる存在
(ここでは感性的世界の広がり)と、その存在と自分自身との統一が同時
に成り立つところに、現実的な自己意識が生まれ展開していくのだとい
うことである。「自己意識の現象(感性的世界の広がり)と自己意識の真理
(世界と自己との一体性)との対立が本質とするのは、次のような真理、
すなわち自己意識の自分自身との統一である。つまりこのことが自己意識
にとって本質とならなければならない。すなわち自己意識は欲望である」
(S.104) すなわち自己意識は対自然関係においてふたつの対象を持つ。一
つは、感性的世界の広がりであり、自己意識にとって否定的(自立的)で
ある。もうひとつは自分自身(前者との対立において)である。したがっ
て自己意識とは、この二つの側面を統一しようとする運動である。
- (4) ここに、生命レベルで言われていた「欲望」の経験と「類」を確信した
レベルでの「欲望」の経験の違いがある。前者においては、あくまで対象
の自立性を経験するのみで、常に対象への依存関係から逃れることはなかつ
たが、後者においては、対象の自立性を乗り越える視点を自己意識は獲得
している。したがってこの自己意識は新たな場面へと移行できるのである。
生命の場面から社会性(精神)の場面へと移行する。

- (5) たとえばボンジーベンは、「精神は本質的に相互主観性であり、その構造は、自己意識の対象すなわち生命とのさまざまな関わり方によって規定されるのであり、その関わり方へと自らを意識するようになった意識は還帰していく事ができるのである。自己意識の根本的な状態や立場についての後述の叙述（主と奴の弁証法、ストア主義、懐疑主義、不幸な意識）にとって、その都度その都度の自己意識の生命への近さやあるいは遠さが決定的になる」（W. Bonsiepen; Einleitung zu “Pänomenologie des Geistes, Felex Meiner Verlag, Hamburg, XXXIV）と述べて、「自己意識」章AとBの展開の軸にあるのは、意識と生命の解離にあると見ている。
- (6) ヘーゲルが実際に共同体構想のモチーフの原型として何を考えていたかということに関しては、近代的市民社会であるとかギリシア的共同体であるとかキリスト教団的な共同体（Gemeinde）が挙げられるのではないかという疑問が起こるのであろう。フランクフルト期のヘーゲルを考えてみれば、ギリシア共同体や宗教的な要因が共同体構想の根源にかかわっていると思われるが、ここでは『精神現象学』の論理展開に絞って、生命を共同体構想の原型と考えてみた。
- (7) この点については、島崎隆著『ヘーゲル弁証法と近代認識』（VI. VII. 章、未来社）を参照のこと。
- (8) 人間の実存という観点から、「自己意識」章の生命論を扱った論文にイポリットの「ヘーゲルの『現象学』における実存」がある。（J・イポリット、宇津木・田口訳『マルクスとヘーゲル』法政大学出版局）